

Newsletter



発行●大妻女子大学人間生活文化研究所

No. **10**
2018

CONTENTS

特別研究員として	1
協賛企業	1
シリーズ「大学と科研費」	
年表を作る ―研究の礎として―	2
大学教員という仕事と研究の楽しみ	4
「科研塾」が開催されました	6
電子書籍「Otsuma eBook」	6
人間生活文化研究所の110周年記念事業	7
科研費 PDCA スケジュール	8

特別研究員として

大妻女子大学人間生活文化研究所（以下研究所）には、平成28年（2016年）度から特別研究員の制度が設けられております。現在特別研究員として、大妻女子大学名誉教授や東京工業大学名誉教授など10名が在籍しております。特別研究員は各分野において優れた研究業績を有し、研究所の様々な事業に協力することが求められております。特別研究員には、科研費を取得し積極的に研究を展開していたり、Otsuma eBookを出版している研究員もおります。研究所の特別研究員の部屋には数名の特別研究員がパソコンなどで研究に勤しんでおります。

私は大学退職後も学会や研究などのアカデミックな活動をライフワークとして継続することを考えております。これらの活動を実践するためにはアカデミックな所属とメールア

ドレスがあると好都合です。研究所にはこれに相応しい制度があり、今年4月から特別研究員として活動することになりました。月に数回研究所に出かけ、研究所のパソコンを利用しながら、充実した研究活動を続けております。

私が会長を務めている一般社団法人日本温泉科学会は平成31年（2019年）に学会創立80周年となり、記念事業として「図説 温泉の科学」を朝倉書店から出版予定です。また、学会では温泉関連の科学や文化などの情報を収集した日本温泉文献目録（I）では大正10年-昭和45年（1921年-1970年）を収録したものを昭和48年（1973年）に出版以来、継続して平成20年（2008年）には平成3年-平成12年（1991年-2000年）を収録した同（IV）まで出版してきました。今回は Otsuma eBookとして平

成13年-平成22年（2001年-2010年、同V）、平成23年から10年間分（2011年-2020年、同VI）を出版予定です。

特別研究員としてこのようなアカデミックな活動ができ、研究所ばかりでなく大妻女子大学の研究活動の活性化にも貢献できるのは素晴らしいことです。総合情報センター図書館が階下にある資料収集も容易です。人間生活文化研究所の特別研究員となり、自由で豊かな実りある人生をエンジョイしませんか。

大妻女子大学名誉教授
（平成30年3月まで
社会情報学部教授）
大妻女子大学人間生活
文化研究所特別研究員



一般社団法人
日本温泉科学会長
井上 源喜

【協賛企業】 人間生活文化研究所の事業は、多くの企業の皆様からご支援いただいております

前田建設工業株式会社
清水建設株式会社
ダイダマン株式会社
株式会社三井住友銀行
株式会社九電工
山崎製パン株式会社

株式会社オンワードホールディングス
三菱地所株式会社
株式会社オカムラ
富士ゼロックス株式会社
株式会社三越伊勢丹プロパティ・デザイン
キューピー株式会社

東京ケータリング株式会社
株式会社内田洋行
SMBC 日興証券株式会社
株式会社中村屋

（順不同、平成30年10月現在）

年表を作る ― 研究の礎として ―

まず、現在の私が当面している課題のことから述べさせていただこう。

一昨年七月、これまでの研究論文のうちから主なものを選んで『泉鏡花素描』（和泉書院）を上梓することができた。既発表のものは十七編、書きおろしが、総説と、巻末「泉鏡花と演劇」の二篇のみにとどまったのは非才というほかないが、特に後者は、今までほとんど論及の対象にしてこなかった演劇の分野を、主に鏡花作品＝「鏡花もの」の上演史からたどった論考で、この歳にして、ようやく鏡花における演劇の問題を把握する糸口を得たような気がする。

とはいえ、それはあくまでも端緒であって、むしろ考究すべき問題の多さや、その解決の困難さを自覚するに至ったのである。

よく知られているように、演劇において泉鏡花と最も深いつながりのあったのは、いわゆる「新派劇」という演劇ジャンルである。いまや一つの劇団の名称になってしまっているが、「新派」とは、明治二十年代の壮士芝居を起源とし、「新演劇」「正劇」などとも呼ばれながら、明治三十年代の後半に「本郷座時代」と称される全盛期を現出した演劇様式をさす。

「旧派」（＝旧劇・歌舞伎劇）に対する「新派」であり、その近代性の有無について議論の余地はあるものの、少なくとも、歌舞伎には無い「写実性」や「現代性」を求めた風俗劇であり、それゆえに多くの観客を魅了して、一時代を劃したといつてよい。

鏡花の生涯に重ねるなら、「義血俠血」を改題した川上音二郎一座の「瀧の白糸」初演（明28・11）以降、「通夜物語」「辰巳巷談」「婦系

図」等の花柳風俗小説のヒロインを、喜多村緑郎、河合武雄ら小説好きの女形が演じつつ、芸の「型」を編み出してゆく過程で、劇的要素に富むプロットと場面構成を備え、会話に迫真や妙味のある鏡花の小説が、「鏡花もの」として殊のほか尊重され、新派劇の演目を潤していたのであった。

明治末に興った文芸協会、自由劇場の新劇運動の影響で、大正期には停滞するが、昭和期に入っても喜多村の弟子の花柳章太郎や水谷八重子（先代）の存命中は、新派の芝居が劇壇に有力な地位を占めていたし、依然としてその中心は「鏡花もの」だった。

演劇史では以上のように概括されるのだが、歌舞伎や新劇にくらべ、研究面において、新派劇は残念なことに最も立ち遅れている分野なのだ。というのは、今からちょうど七十年前の昭和二十三年（1948）に刊行された柳永二郎の『新派の六十年』（河出書房）を凌ぐ研究がいまだに現れていないからである。

花柳章太郎と同世代の俳優であった柳は、新派の渦中であって、学究的な資質に恵まれた稀有の人物であるが、豊富な資料と役者としての体験に基づき、新派の濫觴以来の歴史を概観したのち、主要俳優の活動を丹念にたどったこの著書で、とりわけ私が注視するのは、俳優に関する「年表」作製の重要性を説いているところだ。彼は、この年表によって「その人の健康状態から、俳優としての成長、少し心を潜めて判読すれば、その人の心の動揺まで感じられるやうだし、仲間うちの対人関係から、その生きて来た時代の空気までも読める」と説き、そうした

昭和女子大学副学長
大学院文学研究科長

吉田 昌志



俳優ごとの年表の比較対照によって「新派演劇史」が完成するはずだ、と言うのである。

この言葉を服膺して、私は俳優別ではなく鏡花の作品別の上演「年表」の作製をこころざし、主要作品についておおまかなものをこしらえたが、いまだ完成にはほど遠く、粗策にとどまっているのを憾みとする。

やがて新派と呼ばれることになる新演劇の一座が、明治三十年前後には、全国に「三百八十」余り、俳優の数は「五千七百人」余りだった、といわれているが、それらは東京、京阪、名古屋等の主要都市ばかりでなく、全国各地を巡演し、俳優の離合集散を繰り返していたので、従来の年表（『近代歌舞伎年表』）が備わる都市部のみでは、とうてい「鏡花もの」上演の全体像を把握することができないのだ。

「年表」というと、無機的な事実の羅列にすぎぬ印象をもたれがちだが、ある目的のもとに特定の視点によって蒐集した事実の連なりを「一覧」できる「年表」は、研究の礎を成す有機的な資料体（コーパス）であって、既製のものからの抜粋ではなく、自らが作製してはじめて有用となる。

私はつねづね、鏡花が身を置いていた明治、大正、昭和の三代、それぞれの時代に立ち戻り、その時をともに生きてみたい、と願っている。全国各地にわたる通時の上演年表を作り、「鏡花もの」の上演を当時の人々がどのように観て、どのように感じていたのかを探って、「その生きてきた時代の空気までも読める」（先の柳永二郎の言）ようにすること、それが現在の私の研究課題である。

では、この課題を解決するためにはどうすればよいのか。はっきりしているのは、こうした年表の作製を個人で行う場合、気の遠くなる時間を要し、必然的に共同作業が要請されるということだ。

これを科研費へ応募するとすれば、「基盤研究」になるが、鏡花作品の「上演」は、舞台への上場ばかりではなく、時代に応じて、映画やラジオなどの新興メディアへと拡張してゆくので、文学・演劇関係にとどまらず、周辺領域を対象としなければならなくなる。共同研究を必至とするゆえんである。

しかしながら、いきなり申請の手続きへと進むのではなく、できればこの課題の遂行が、妥当かつ有効であるのか、検証してもらう機会を持ちたいところだ。幸い、今年で発足から三十四年を迎える泉鏡花研究会という集まりがあって、年に四回開催されているから、この場をかりて発表することは無論可能なのだが、しかし鏡花研究者の人たちに理解してもらったとしても、分野の異なる研究者の眼から見てもなお妥当なのか、ぜひとも第三者の意見を参酌したいと思う。もし学内にそのような場が設けられていたなら、より良い研究計画が立てられるにちがいない。科研費申請の前に、まず私が取り組むべきは、こうした場を調えることなのである。

大学教員という仕事と研究の楽しみ

A. 大学教員の仕事とその評価

『教員評価制度の運用と大学風土改革』（平成20年7月/小会刊）の資料集の編纂に際して、地域科学研究会高等教育情報センター（KKJ）高等教育キーパーソン各位へのネット調査を実施し、「“教員評価”の状況とこれからの進化」のレポートを掲載した。高等教育改革の最大のカギは“教員の個人力”にあり、そのためには“教員人事の活性化”がキーであるとの課題意識からであった。人事評価・考課は、客観性の視点から、項目が詳細になり手法も精緻になりがち。しかしながら人間は、本来的にカオスな生命体であり、“志”や“情熱”といったエモーショナルなものへの主観評価も大切である。

主なアンケート5項目の第1は、「教員評価についての私的体験 1. 大学生時代の“師”（教員）たちへの評価 2. 自身が受けた教員評価」とした。本調査は他に類がないものとなった。そして、KKJとしての具体提言を行った。「大学教員の『教育』へのモチベーション・情熱と創意工夫を引き出す最大のカギは、『今、私が最も関心を持ち、知的営みをしているテーマ・事例について、学生とともに学ぶ“授業”とする』ことであろう」と。詳細は貴大学の学長室か図書館にある（であろう）本資料集をご高読願いたい。

そして、さらに大学教員各位に次の発問をしたい。

〈大学教員にとっての“自省”とは〉

～何故に、今、大学で教師をしているのか？

1. 大学・大学院時代の“師”（教員）たちへの私的評価

～教育面、研究面、人格他/当時と現在/反面教師～

2. 学問（専攻）との出会い～知的興奮の原初
3. 何時、何故に、どんな教員になろうとしたのか～その初心
4. 何時、どうなったら大学教員を止めるのか～専門職としての覚悟
- ～とにかく、一律の年齢制限・定年制は不要～

B. 大学教員人事の基本ポリシー

大学教員の人事・評価・処遇システムの深化と展開のポイントについての私見は下記の通り。

- 大学教員を教育系と研究系に2大種別化。大学は採用募集時にその別を明示（大学としては、教育系教員を優遇）
- 教員の4大職務～教育、研究、経営管理、社会・地域貢献のウエイトについて、前年度に自己申告し、大学側と協議。（教員の自主性・主体性の尊重）
- 教育系教員は「ティーチング・ポートフォリオ」を毎年作成するとともに、『教育紀要』に論考、『学会誌』に教育論文を執筆。（ユニバーサル期の多様な学生に対応する新たな教員像）
- 研究系教員は大学院教育を主担当するとともに、附属研究所・研究センターを本務とし、主たる研究資金は国・公・民間の公募型外部資金を調達するとともに、企業等との共同研究。（1人研究所方式・プロジェクトディレクター制の積極活用）
- 大学院教育は研究者養成とともに大学教員養成の拡充。（研究力とともに教育力も、教育のための研究）
- 中・高齢社会人を教育系教員に積極任用し、学生の人間性・社会性・市民性・キャリア力の養成。（アカデミック系教員とのチーム・

地域科学研究会高等教育情報センター（KKJ）代表
高等教育計画経営研究所常任同人

青野 友太郎



ティーチング授業も）

○短期インターンシップから、3カ月・6カ月の
“コーオブ教育”に進化させ、多様な社会現場
において実務系客員教員を任用。（2・5年制
短大、5年制大学システムの創意・導入）

○大学教員は、「大学という学校制度」の制約の
中で、“学識”の持つ本質的営みへの知的誠実
性と自律主体性を保持すべしというアンビバ
レンツに立つ。（知的コミュニティとしての
大学キャンパスの再構築へ）

以上、いささか独断の論展で恐縮であるが、
冒頭の資料集の「はじめに」において提言した
17項目の中からの8項目を掲げた。

C. 大学教員にとっての研究の楽しみ

研究といっても、国際レベルの先端的・革新
的なものと、基盤学術的・個人趣好的なものに
種別されよう。前者においては、研究資金・体
制が大型化し、自ずと外部資金獲得への積極的
なアプローチとなる。後者については、外部資
金への積極派と消極派に分かれる。しかしなが
ら、近年特に国立大学における個人研究費は大
幅に縮減し、10万～20万円レベルも多いと聞
く。若干の学術書を購入し、学会に1～2回参画
したら費消されてしまう。そこで、“科研費”の
出番である。

現在、KKJにおいては『科研費改革と研究計
画書の深化』ハンドブックの編集制作の最終段
階を迎えている。好評をいただいた平成23年
10月刊、平成26年10月刊を継承して、今次の
“科研費改革2018”に対応した実践ガイド書と
なる。日本学術振興会からは理事牛尾則之氏と
前研究事業部長（現・九州工業大学理事・副学
長）長澤公洋氏、横浜市立大URAの岡野恵子氏、

そして大妻女子大副学長・人間生活文化研究所
長の大澤清二氏のコアパースン各位の所産とな
る。ホット情報への対応・収録のため、10月15
日刊行となる。計画調書の最終チェックと、バー
ジョンアップに活用いただきたい。乞うご期待
である。

経常的な運営費への国庫補助が低減する中
で、間接経費30%が機関に入るのは大なる魅力
であり、大学という組織体の一員である教員に
とっては、全くもって応募は責務といえよう。
しかしながら、極めて非協力的で学内研修会に
参画しない人物もいる。

ある大学では、前述の既刊ハンドブックを全
専任教員に配布して、第1回研修会に位置づけ
た。そして、2～3名の教員が新たな申請・採択
の成果を得て、本代はその間接経費で十分にま
かなえたとのこと。

“自由な発想に基づく研究”に対して、使い勝
手の自由度も高い“科研費”に手を挙げないこと
は、信じられない。民間の立場で、調査研究を長
年にわたり実施してきたKKJからは、改めて、
大学教員各位に“科研費申請”を強く勧める次第
である。本日、主要研究種目に係る「平成31年
度科研費公募要領」が公表された。是非とも、“軽
い心”でチャレンジされんことを!!

地域科学研究会高等教育情報センターの
ホームページはこちらです。併せてご参照
ください。

<http://chiikikagaku-k.co.jp/kkj/>

競争的外部資金の獲得支援事業

「科研塾」が開催されました

人間生活文化研究所では、大妻女子大学教職員、大学院生を対象に、研究支援室、総務・財務グループと協働で科学研究費助成事業申請講座「科研塾」を開催しています。

7月26日に開催された科研塾では、平成29年から始まった文部科学省による科研費改革とその対策に焦点を当てました。

第一部の講師に日本学術振興会の吉田正男氏（研究事業部研究助成第一課・課長）をお迎えし、『「科研費」の最近の動向』についてご講演いただきました。平成30年度から適用された科研費の改革、変更点（審査方法の変更等）を解説していただき、さらに、平成31年度公募から適用される改正点、今後の課題についてご教示いただきました。

第二部では、人間生活文化研究所の大澤所長、下田講師から、実際に科研費に採択された研究計画調書をもとに、平成31年度科研費に応募する際に必要になると予想される要素や、注意点などを含む戦略的な作成方法が伝えられました。

第一部・第二部の講演から、科研費の改革は今後も続くことが考えられます。科研塾では、今後も新しい情報、申請に重要な情報をお伝えしていく予定です。（人間生活文化研究所 上田記）



東京家政学院大学、法政大学を含め、58名の方にご参加いただきました。

電子書籍「Otsuma eBook」

人間生活文化研究所では、電子書籍の出版を行っています。電子書籍ならパソコン、タブレット、スマートフォン等にダウンロードして、いつでもどこでも手軽に読むことができ、本棚のスペースをとらず、色あせることもありません。

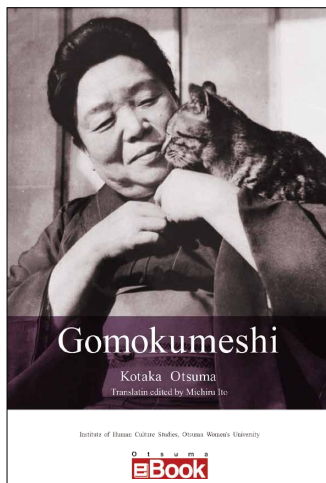
また、印刷・製本・輸送費など、出版にかかる費用を大幅に削減することができます。欠品・絶版になるリスクもありません。出版された書籍にはISBNが付与され、ウェブサイト「Otsuma eBook」より世界中に発信されます。



Recommended Titles >> <http://www.ihcs.otsuma.ac.jp/ebook/>



『Gomokumeshi』（原本 大妻コタカ著『ごもくめし』）



〈訳者代表〉伊藤みちる 大妻女子大学 国際センター
〈発行〉平成30年3月30日
〈形式〉PDF
〈ISBN〉978-4-907136-11-6



〈訳者代表のことば〉

平成30年に創立110周年を迎えた大妻学院の学祖大妻コタカ先生の自叙伝『ごもくめし』の英語訳。大妻学院の歴史や教育理念、明治から昭和にかけての日本社会の変遷と、コタカ先生の一生が描かれている。大妻教育は、校訓「恥を知れ」や「良妻賢母」、そして「よき妻、よき母、よき社会人たれ」の理念を掲げ、社会で広く活躍する女性を育ててきた。本書は、国連機関や外資系金融機関、世界進出を果たした老舗和菓子会社、旅客機客室乗務員を経て中学校や英会話学校などで活躍してきた、生粋の大妻女子大学卒業生7名が英訳を担当した。

大妻女子大学博物館

特別展 東南アジア狩猟採集民の生活と子どもの发育発達

■平成31年3月4日(月)～5月18日(土) 開館時間10時～16時

■共催 国立民族学博物館(大阪府吹田市)

※3月6日(水)以降の休館日:日曜、月曜、火曜

人間生活文化研究所長、専任職員らが、科学研究費助成事業により実施してきた調査によって得られた研究成果、収集資料(地図、模型、写真、絵画等)を展示、公開します。

■基盤研究(A) 代表者 大澤清二

2015-2019「人が生育する限界的環境に於ける发育発達(生活技術の発達を含む)と成熟の総合的研究」

2011-2015「アジア採集狩猟民児童～大都市児童の发育発達多様性と環境の相互作用、含む標準値作製」

2006-2009「東南アジア諸民族児童の发育発達(標準値作製を含む)と生育環境の相互作用」

■基盤研究(B) 代表者 下田敦子

2018-2022「ミャンマー135民族の民族服製作技術の残存調査と技術学習過程の最適化方法論の開発」

2014-2018「東南アジア伝統衣服製作技術体系の解明と伝承教育最適化のためのプログラム開発」

■挑戦的萌芽研究 代表者 大澤清二

2014-2016「僧院における統制されたライフスタイルが少年僧の发育発達に及ぼす影響」

特別展の趣旨

大妻学院理事
大妻女子大学副学長
人間生活文化研究所長
博物館長
総合情報センター所長

大澤 清二



私たちは飛行機やヘリコプターを使ってヒマラヤの氷河に行き、衛星電話を使えば東京と直接話をするができるような、高度に便利な社会に生きています。これからも時代の歯車は不可逆的にまわり続けてゆき、生活はますます便利になり、文明がもたらす恩恵をさらに享受できるようになるでしょう。

しかし、地球上には文明世界の片隅で、時間が停止したように1万年前とほぼ変わらないライフスタイルを続けている狩猟採集民も存在しています。彼らは、今でも農耕や牧畜を行わず、法律や教育、鉄道、医療・公衆衛生、通信などの制度やシステムを知らず、文明の恩恵に浴さないままに、歴史の外側でひっそりと生き続けてきました。彼らは深い森や人跡の絶えた山地、あるいは海洋に点在する島々など、人目につかない環境に身をおき、細心の注意と警戒心をもって外部世界と距離をおき、少しでも危険を察知したら迅速に姿を隠してきました。それゆえに、私たちは彼らを幻の民などと呼んで、神秘的な存在として理解してきました。彼らは、探検家や研究者にとっては長い間大変魅力ある存在でした。現代人が遠い過去に通り過ぎてしまった段階のライフスタイルを実際に今も行っているわけですから、彼らを知ることは私たちの祖先の生活や行動、生存適応戦略を知る上での貴重なヒントとなり得ます。

私たちは、彼ら狩猟採集民の生活と生態を何とか知りたいということから、アジアの山地、森林、海洋などに彼らを対象としたフィールド調査を企画し、おおよそ12年間にわたって、データ、資料を積み上げてきました。幸い、この研究課題では全期間科研費の交付を受けました。

今回の特別展でご紹介するのは、ミャンマー連邦共和国のアンダマン海の洋上で生涯を過ごすモーケン族(サロン族)と、タイ王国のナーン県の山地を遊動してきたムラブリ族(ピートンルアン族)です。モーケン族については、ミャンマー国内の調査が不可能であるために今日まで科学的なデータの蓄積はありませんでした。私たち以外に調査隊は入っておりません。今回の展示は、世界で初めての資料展示ということになります。一方のムラブリ族は、近年定住化が進んでいます。ここでは、移動民が定住化の過程で環境にどのように適応してゆくのかという、学術的には非常に重要な問いの解明に期待が寄せられています。

さらに、今回の特別展では特に、ミャンマー最深部のカヤー州に住む、人体変工(首輪や足環を装着)を生業にわたって行っている大変珍しい文化をもつカヤン族についても紹介し、衣装展示もいたします。

これらの展示を通じて、来館の皆様が「人間とは何か?」を考える機会にしてくださることを願っております。



現在、ミャンマー芸術文化大学の専門家の協力のもと、モーケン族の狩猟生活がわかる模型を製作中です。

お知らせ

日本文学図書 約450冊を ミャンマー連邦共和国に向けて発送しました！

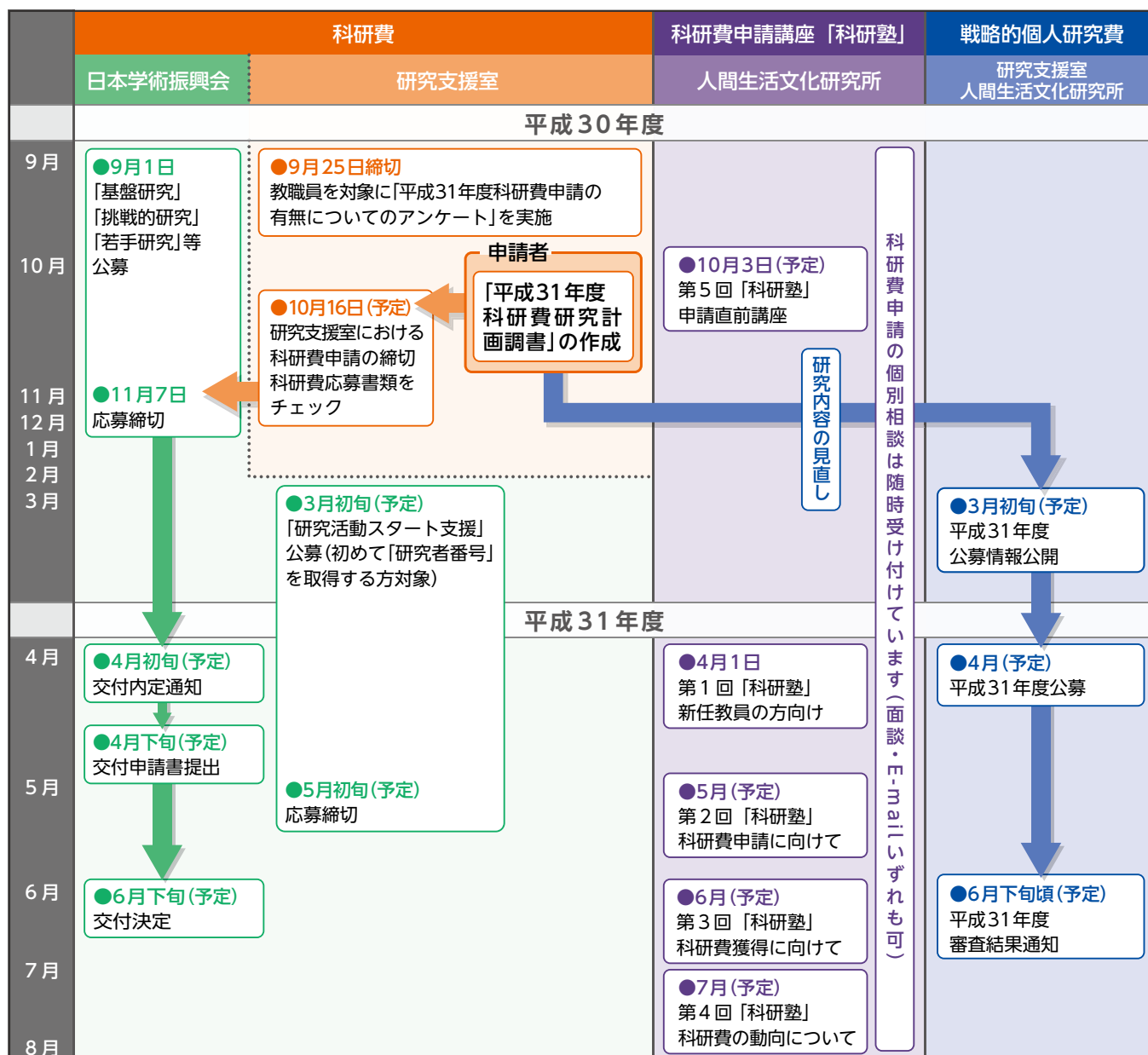
人間生活文化研究所では、大妻女子大学図書館と協働して、私立大学図書館協会が行う「海外の大学等への寄贈資料搬送事業」に応募し、平成28、29年度には、約1,850冊をミャンマー連邦共和国の国立図書館（ネビードー）や民族開発大学図書館（ザガイン）に寄贈してきました。

連続5回目の採択となった平成30年度（7月）は、現地からの要望に応じて、近代・明治期を代表する日本文学図書を含む約450冊をヤンゴンの国立図書館に寄贈しました。現地の一般の方々、日本文学を研究したいという方々に広く役に立てていただけることを願っています。

ミャンマー国立図書館（ネビードー）に到着したばかりの図書の前で
（左がライブラリアンの方、右が大澤総合情報センター所長 昨年度撮影）



科研費PDCAスケジュール ～人間生活文化研究所が行う学内に向けた科研費獲得支援～



大妻女子大学人間生活文化研究所

〒102-8357 東京都千代田区三番町12番地 大妻女子大学図書館棟6階

Tel: 03-5275-6047 Fax: 03-3222-1928 E-mail: info@o-ihcs.com

HP: <http://www.ihcs.otsuma.ac.jp/>



▶ ニュースターの最新号およびバックナンバーはホームページよりご覧いただけます。

※ このニュースターは、全国の大学・大学院、企業研究所、研究助成団体、官公庁などの関係機関に、およそ1,900部発送し、配布しています。